

日刊 建設工業新聞



南 泰裕

建築家、国土館大学准教授

冬のある日、紅茶に浸したマドレーヌを何げなく口にした瞬間に、主人公である「私」の、過去の記憶が一気によみがえる。そこから、故郷のまちの建物や気配、道路の連なりといったものがありありと思い出され、膨大な記憶の集積が、次第に明らかにされてゆく。

で、文字通り「失われた時を求めて」、多大な被害を受けた東北集落の、再現模型展示に関わったからだ。2011年の12月から翌年1月にかけて、東京都

り戻すべく、震災以前の街をできる限り忠実に再現しようとするものだった。このプロジェクトに、全国15大学、18の研究室が参加し、私たちの研究室もその1チ

徹夜を繰り返しながら総出で作り上げた500分の1模型が並んだ展示は壮観で、多彩でダイナミックな地形に呼応しながら、巧みに集落を作り上げてきた東北沿岸の街の連なりを、手に取るように感じ取ることができた。そのオープンニング・レセプションには、建築家の原広司さんと妹島和世さんも駆けつけて下さり、原さんからは復興支援

生への足がかりを築いていくこととする試みの一貫であり、災害によって一掃されてしまった場所に、新しく頑丈な建物や道路を作ることだけが重要なのではない。それまでの膨大な記憶の集合を、できる限り再現し、過去へとまなざしを注ぎ続けることもまた、復興の重要な活動のひとつだろう。震災復興は急を要するもの

これは、被災前の街の風景や復興の様子などを写真と動画で募集し、それらを地域や時間ごとに閲覧できるようにしている膨大なデータベースである。こうした資料の蓄積は、震災で街を失った人々にとって、かけがえのない心のよりどころとなるだろう。また、建築学会誌でも、2012年1月号は「前夜の東北」という特集を組んでおり、震災前夜、すなわち3・10以前の東北が、いかなる特徴を持った地域だったのかというところを、過去に遡って多

「失われた街」の記憶を求めて

あまりにも有名な、20世紀文学を代表するマルセル・プルーストの、『失われた時を求めて』の冒頭部分である。

現代美術館において開催された、「失われた街―三陸に生きた集落たち―」展である。これは、神戸大学准教授の槻橋修さんが企画したもので、三陸のリアス式海岸に点在する11地域の集落に関して、その記憶を取

ームとして参加させていた。だくことになった。ここで私たち国土館大学

を長期的視点から行うことの重要性がアドバイスされた。これらの模型は、今後、他の美術館でも展示される予定で、最終的には各集落へ寄贈され、将来の復興計画の一助となることが期待されている。それは、津波によって振り返る間もなく流されてしまった街と人々の思い出を、できる限り丹念に呼び戻し、そこから再

がある一方で、時間をかけなければなし得ないものもある。多くの集合的記憶の断片を集めてアーカイブとして紡ぎ上げ、それを一つの織物に仕立て上げていくことは、まだまだ長い時間を必要とするだろう。

震災から1年を迎えた今、不可避的に3・11以前の街や記憶が遠のいていく中で、「失われた街」の記憶を求め作業の重要性は、日々、増しているに違いない。これらの記憶をできる限り集め、共有することが、未来の東北を思い描く礎となることを期待したい。

所
論
諸
論

日本全国の学生たちが、

例えはGoogle社は、昨年の5月から「未来へのキオク」という震災復興プロジェクトを立ち上げており、今も続いている。

これは、被災前の街の風景や復興の様子などを写真と動画で募集し、それらを地域や時間ごとに閲覧できるようにしている膨大なデータベースである。こうした資料の蓄積は、震災で街を失った人々にとって、かけがえのない心のよりどころとなるだろう。また、建築学会誌でも、2012年1月号は「前夜の東北」という特集を組んでおり、震災前夜、すなわち3・10以前の東北が、いかなる特徴を持った地域だったのかというところを、過去に遡って多

これは、被災前の街の風景や復興の様子などを写真と動画で募集し、それらを地域や時間ごとに閲覧できるようにしている膨大なデータベースである。こうした資料の蓄積は、震災で街を失った人々にとって、かけがえのない心のよりどころとなるだろう。また、建築学会誌でも、2012年1月号は「前夜の東北」という特集を組んでおり、震災前夜、すなわち3・10以前の東北が、いかなる特徴を持った地域だったのかというところを、過去に遡って多